



Title	教育と公共性(9) : 市立札幌旭丘高等学校の学校改革と公共性
Author(s)	小出, 達夫
Citation	公教育システム研究, 18, 83-106
Issue Date	2019-09-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/75776
Type	departmental bulletin paper
File Information	040_AA11562857_18.pdf



< 論 文 >

教育と公共性 (9)

市立札幌旭丘高等学校の学校改革と公共性

小出 達夫*

——目 次——

はじめに

I 改革準備期 (1998 年－2003 年)

II どんな人間を育てようとしているか (普遍の極)

III 教育目的をどのように実現しようとしているか (媒介の極)

1 媒介の極: “4 つの出会い”

2 媒介の極 1－モノとの出会い (単位制カリキュラム)

3 媒介の極 2－未来との出会いの世界 (総合的な学習の時間)

4 媒介の極 3－ヒトとの出会いの世界 (School LIFE)

IV 生徒の変容 (個別の極)

V 行政機関と高校改革

VI 考察

【キーワード】 高校教育改革、進学優先高校、教育と公共性、個別・普遍・媒介

はじめに

この論稿は、2000 年前後から始まる札幌市立高校の教育改革の実相を通して、教育の公共性の現れをいくつかの高校を事例として取り上げ、検証することを意図したもので、一連の論考の一部である。

前稿の「教育と公共性 (7)」では、1997 年から 2003 年にかけての札幌市教委による改革の取り組みを検証した⁽¹⁾。この市教委の取り組みにより、各高校が改革に主体的に取り組む条件が作り出された。それは“下からの改革”、“現場からの改革”を意図したものであった。

今回の論考では市立札幌旭丘高校を取り上げ、公共性の空間構造から見た場合、旭丘高校の改革はどのような内容と特質をもつかをみた。ここで言う公共性の空間構造は、この空間が生徒の自己実現を課題とし、個別・普遍・媒介の三極から構成されるという命題を前提としている。個別の極は生徒で構成され、普遍の極は学校の教育目的を意味し、媒介の極はその目的をいかなるシステムによって実現するかという媒介空間を意味する。生徒はこのような空間構造のもとにおかれて、自らの人格の自己実現を追求することになる。そしてこの人格の自己実現こそが三極共通の課題となる。

学校の公共性の質は、その学校に入る生徒がどのような問題を抱え、どのような課題をもつかによって決まる。この傾向は小中学校に比べ、高校では特に際立って現れる。旭丘高校の公共性の空間は、『公教育システム研究』第 16 号でみた北星余市高校の公共性の空間構造とは異なるし⁽²⁾、また同研究誌第

* 北海道大学名誉教授

18号で見た札幌大通高校のそれとも異なる^③。このような個別研究を通して教育の公共性に迫ろうとするのが、この一連の論考の課題である。

なお、ここで付記しておきたいことがある。旭丘高校は札幌市内の高校の中でも有数の進学校のひとつであるということである。この点で札幌大通高校とも、北星余市高校とも異なる。その違いは、旭丘高校のほとんどの生徒が大学へ進学しているということである。このことを前提にして、この学校が作り出す独自の公共性について考えてみたい。

なお、現在私が考えている「教育の公共性の空間構造」については、試論として著わした「学校教育と公共性」で取り上げた^④。これらを合わせて検討されると、私の構想が理解されると思う。

I 改革準備期 (1998 年—2003 年)

まず改革に至る経緯を見てみよう。旭丘高校『50 年史』によると、1998 年に旭丘高校では改革の大議論が起きたという。この年は、市教委がちょうど「札幌市立高等学校の今後のあり方—中間まとめ—」を出した年に当たり (98 年 8 月)、市教委は各高校に改革の議論 (各学校の特色化) を要請した。99 年着任の田村勤校長の下で「市立高校の今後の在り方」が議論され、「大市立高等学校構想」が提起され、これはこれで大胆で面白い構想であったが、市教委では不評で、「やる気があるのか」と言われたようだ。ついで 2000 年 12 月には、改革テーマを中心に校内研修会を開いている。こうして田村校長の下で旭丘高校の改革がスタートした^⑤。

2001 年 4 月に島隆校長が着任し、改革試案の「21 プロジェクト」は、蒲生崇之を中心とする委員会にゆだねられた。しかしこの 1 年間、改革意見は百出したが、具体的プランはまとまらなかった。2000 年 1 月に新校舎新築のため学校は仮校舎へ移転し (2001 年 8 月新校舎完成・移転)、新校舎建築をめぐる積極的な議論が引き起こされた。校舎の建築は、学校の教育目標や教育課程と密接に関わる問題であり、これらをどうするかが問われたのである。しかし当時は主にコース制にするか単位制にするかをめぐって議論し、結論を出せない状況にあった (多数派は単位制を支持) ^⑥。

ついで 2001 年 5 月には、札幌市立高等学校教育改革推進協議会の第 1 次答申が出されたが、この時点でも旭丘高校の改革構想は定まっていなかった。他方、旭丘高校は、高等学校学習指導要領の改定 (2003 年 4 月実施) と 2002 年の学校 5 日制 (授業時数の縮小) にも対応しなければならなかった。このような状況にあって、具体的改革プランの作成は 2002 年に引き継がれた。

2002 年島校長の第 2 年目 (宮浦教頭着任) に入り、改革プランの作成は精力的に行われ、秋には単位制を 2004 年度から実施するという計画を策定し、要望書を札幌市教委に提出した。これを承けて 2003 年 2 月、市教委は旭丘高校の単位制移行 (2004 年度) を正式に決め、「札幌市立高校改革推進計画」の中にもらった。それ以降旭丘高校では、単位制の実施が計画から実務の作業へと移ることになった。

この間数年にわたる旭丘高校の経緯を見ると、教師の意識変革がいかに迫られたかが分かる。20 世紀末にかけて少子化が進み、1996 年には旭丘高校の入学定員割れが生じた。市教委周辺では市立高校の廃止がささやかれた。教師の危機意識は高まり、「学校を変えなければいけない」という状況が生れた。学校 5 日制による授業時間数の減少や新学習指導要領による卒業単位数の減少により教科間の授業時数をめぐる確執がおきた。また教師主導のカリキュラムか、生徒中心の自由選択型カリキュラムかの選択も迫られた。教育課程をめぐることは、コース制か単位制か、単位制にした場合は受験重視型の単位制か、それとも大学入学後の進路を見通した“教養型”の単位制かが問われ、また選択科目をどの規模にするかが問題となった。更には新教育課程において、総合的な学習をどうするか、それは文・理分離型の総合学習か、文・理統合型の総合学習か、総合学習のクラス編成や担任制をどうするか (40 人クラス編成か 20 人クラス編成か)、などが問われ結論を迫られた。こうした課題において、一人一人の教師の教育

観が試され、教師間の意思の統一が迫られた。それは、どんな生徒を育てるかをめぐり、教師の人生観や世界観が試された数年間であったといえる。またそれは、旭丘高校の普遍の極をいずれに見いだすかという課題に対応した数年間でもあった。この間の事情については北海道札幌旭丘高等学校『50 年史』の「座談会、単位制移行と校舎改築」によく現れている。

以下の行掬では、旭丘高校の公共性の空間構造がいかなるものかに焦点を据え、その実相を検討したい。その場合先に指摘したように、公共空間の普遍・媒介・個別の三極が具体的にどのようなものとして形成されたかを検証したいと考える。そこには旭丘高校独自の世界が見いだされるに違いない。

Ⅱ どんな人間を育てようとしているか（普遍の極）

旭丘高校はこの改革でどんな人間を育てようとしたのであろうか。旭丘高校における普遍的課題はなんであったのか、それをまず探してみたい。

旭丘高校の『学校要覧』をみると、その冒頭に次の様な「学校教育目標」と「重点目標」が記されている。

[学校教育目標] 1 高い志をもち、自ら真理を探究する人間の育成 2 進取積極的に自ら社会に貢献する人間の育成 3 文化の創造と発展に寄与する人間の育成 4 逞しく生きるための体力と豊かな人格の育成 [重点目標] 1 「自ら、真理を探究する人間」の育成： 知識の吸収に努め、論理的・科学的考察にもとづいて新たな真理を見いだす力を育む。 2 「自ら文化を創造する人間」の育成： 感性を磨き、旺盛な想像力を発揮しながら生活文化の発展充実に寄与する力を育む。 3 「自ら社会に貢献する人間」の育成： 理想を求め、他者への思いやりや正義感にあふれた未来社会を築く力を育む。

この二つの「目標」は、単位制移行に伴い改正されたものである。ここには、旭丘高校の目指す「普遍の極」がなっており、「個別の極」である各生徒の育てるべき人間像がなのであるかが描かれている。

「学校教育目標」からは、「真理探究」「社会貢献」「文化創造」「体力育成」「人格育成」などの課題が、旭丘高校の人間形成の目標（普遍の極）であることが分かる。これらの目標をさらに具体化したのが「重点目標」である。「真理探究」が知識の吸収および論理的科学的考察力の形成であり、「文化創造」が感性の錬磨や想像力の発揮および生活文化の発展であり、「社会貢献」が理想の追求、他者への思いやり、正義に貫かれた社会の形成であることが分かる。

私がこの「目標」を見て直感的に気づいたことがある。それは、これらの目標と教育基本法（旧法）の前文および第1条（教育の目的）・第2条（教育の方針）にある教育目的との類似性についてだ（当時はまだ旧法が生きていた）。そこにはきわめて強い関連性がある。旭丘高校の「目標」に書かれた個々の字句を見ても、教基法に盛られた字句と同じものがいくつもある。この共通性が旭丘高校の教育目標の著しい特徴である。この共通性の内容についてごく簡単に見てみたい。

教基法前文には二つの大きな目的（普遍原理）が書かれている。一つは、「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成」であり、他の一つは「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造を目指す教育」である。これらふたつは、旭丘高校の「学校教育目標」（以下「目標」と省略）の1の「真理探究」と、「目標」3の「文化創造」と同じである

つぎに教基法第1条との関連を見てみよう。教基法1条にある「人格の完成」は、「目標」の4の「人格の育成」に、「平和的な国家および社会の形成者」は、2の「社会に貢献する人間の育成」に、教基法の「真理と正義を愛し」は、1の「真理を探究する人間の育成」および「重点目標」の1の「新たな真理を見いだす力」、および「重点目標」の3の「正義感にあふれた未来社会を築く力」に、また「勤労と責任重んじ」は、「目標」の2の「社会に貢献する人間の育成」に、同じく教基法の「自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成」は、「目標」の4の「逞しく生きるための体力と豊かな人格の育成」に具体化されているとみてよい。

教基法第2条は、第1条の目的を実現するために必要となる条件を定めたものであるが、そこにある「学問の自由の尊重」は「目標」の1と「重点目標」の1にある「真理の探究」に具体化されており、教基法2条の「实际生活に即し」は「目標」の2の「社会貢献」に、第2条の「自他の敬愛と協力」は、「重点目標」の3の「他者への思いやり」に、同じく教基法2条の「文化の創造と発展」は、「目標」の3の「文化の創造と発展」と「重点目標」の2の「生活文化の発展充実」に具体化されている。

こうした教育基本法との類似性は偶然であろうか、それとも意図してのことであろうか。その経緯は不明であるが、具体的な生徒を前にして、また社会や世界の実情を考慮したとき、自らの学校の教育目標が教育基本法の教育目的と共通するのはごく当然のことと言ってよからう。それは、教基法の教育目標が時代を超えてある普遍性をもっているがためである。旭丘高校の教育改革を前にして、教師たちが真剣に自らの教育目標を考えたとき、この教基法との一致性は当然ともいえる。

かくして教育基本法にある教育目的（全国共通の普遍の極）は、旭丘高校が自ら考えた教育目標に転化したと考えられる。それは特殊としての普遍の極といってよい。法定された普遍の極が、より具体化されて旭丘高校の普遍の極に特殊として保存されたといえるのである。そこには共通性があり、教基法に対する優れた教師の自覚性が見られるのである。

以上を要するに、旭丘高校には3つの教育目標があるということだ。即ち、真理の探究、社会貢献、文化創造の3つであり、これらが総合されて「豊かな人格の育成」（学校教育目標の4）が目指されるということになる。

ここで付言したいことがある。これら3つの目標について重要と思われるポイントを、私見をまじえて述べておきたいのである。

第1は、真理の探究についてである。

この真理探究の活動は、人間にとっての自然的社会的対象である「もの」の世界を観察し、知る活動である。また知るだけではなく、その知識が、自分や人間にとってもつ意味を知ること（知性）を含む。知性は人生の目的や価値について考える力を人間に与えてくれる。更に「知識」や「知性」は、「自我の自由行為の実現の条件として」、「もの」を活用する力を形成する。それと同時に、「真理の探究」には批判の力が必要となり、独断と虚偽のあるところでは真理性は覆われる。独断と虚偽を見抜く力を身につけなければならない。そのためには科学的知識の修得が必要となる（学問の自由）。旭丘高校の「真理探究」には、少なくとも以上に述べた意味と意図が含まれていると思うのである。

第2は、文化の創造についてである。

文化とはなんであろうか。広辞苑によれば、文化は「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果」であり、「衣食住、科学、技術、学問、芸術、道德、宗教、政治など生活形成の様式と内容とを含む」とある。文化とはまさにここで「衣食住」以下に示された人間活動における「生活形成の様式と内容」の精華であり、人間の生活と密接な関連をもち、生活を豊かにするものである。重点目標が言う「生活文化の発展充実」に寄与する力とは、こうした生活全面と関連する文化をいうのであり、そのために「感性を磨き、旺盛な想像力を発揮」しなければならないというのである。感性は、人間と現実世界

との関わりにおいて決定的に重要な意味を持ち、また認知・認識の形成においても不可欠の作用をなす。また感性は文化における個性と創造性の発揮の原動力であり、他方人間と現実世界との関わりを欠いた感性は無意味である⁽⁸⁾。旭丘高校の教育目標にある「自ら文化を創造する人間」の育成には少なくとも以上の意味があると考ええる。

第3は、社会貢献についてである。

重点目標の3は社会貢献を説明して、それは「理想を求め、他者への思いやりや正義感にあふれた未来社会を築く力を育む」とある。社会貢献とはここに言う「未来社会を築く力」の育成であることが分かる。そのためには「理想の追求」「他者への思いやり」、「正義感」の形成が必要だということ。ここでここに言う「理想の追求」は何を意味しているか。教基法第1条の「平和的な国家および社会の形成者」および「真理と正義を愛し」、「勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた国民の育成」に謳われている「社会の形成者」「国民の育成」がイメージされてよいのではないか。また「他者への思いやりや正義感にあふれた未来社会」には、教基法のいう「自他の敬愛と協力」や「真理と正義を愛し」等の教育目的が反映されているとみてよい。ここで特に重要となる価値は、正義価値であろう。正義価値とは人間の共同存在に不可欠の価値であり、それなしには平和的な国家・社会の形成は不可能だからである⁽⁹⁾。

以上旭丘高校の「学校教育目標」と「重点目標」のもつ内容とその意義について、教育基本法との関連を通して見てきた。学校教育における目標は、その学校が独自に定める目標と全国共通に意味を持つ教育基本法の目的とのセットにおいて把握されるべきだからである。

既述したことであるが、旭丘高校の教育目標は、この高校に通って来る生徒の自己実現にとって何が課題とされるべきかを、現場で全教師が格闘し考察して創り上げたものである。それは旭丘高校が生み出す公共空間の普遍的価値が何かを示したものである。その中心をなす価値が、真理の探究、社会貢献、文化の創造であり、そして体力および人格の育成である。学校教育目標がともすると作文に終わる現在、この旭丘高校が示した価値は貴重である。

以上旭丘高校の教育実践が、何を目標とし、どんな人間を育てようとしているかを見てきた。それは教育基本法のコピーではない。教育基本法に示された普遍としての教育目標が、旭丘高校では特殊としての教育目標として現れていることを知るのである。それは、旭丘の教師が、現実に入學してくる生徒を見て、また生徒が将来進む日本の社会の状況を見て、作成した教育目標であり、同時に教師自らの実践の方向を示したものである。それはまさに“生きた普遍”として、教師や生徒の進路を示す羅針盤となるべきものである。

Ⅲ 教育目的をどのように実現しようとしているか（媒介の極）

ここで論ずる媒介の極は、個別の極である生徒の自己実現を、普遍の極を見据えながら、可能にする極である。媒介の極はきわめて多様な要素からできている。この多様性が広くまた深まるほど個別の極に位置づく生徒の自己実現の可能性は大きくなる。以下では旭丘高校の媒介の極がいかなる原理と実践により形成されているかを見てみたい。

1 媒介の極：“4つの出会い”

旭丘高校の『学校案内』の最初の見開きのページを開くと、そこには次に示すこの学校の「理念」が示されている⁽¹⁰⁾。この理念は「21世紀“進学 ADVANCE”構想」と名付けられたもので、その説明は次のようになっている。

“21世紀”ということばには、近視眼的な考え方に落ちることなく、課題や現象の本質をきちんと受

け止め、未来志向で物事を展望してほしいという願いが込められています。また“進学 ADVANCE”というネーミングには、大学進学を目指すみなさんが、この学校で、“合格できる確かな実力”(入試突破の実力養成)とならんで、“大学生に求められる資質”(社会課題・学問研究に対して興味・関心を持ち、幅広い教養を身につける)の習得に取り組み、成果をあげてほしい、という期待が込められています。

普遍の極をどう実現するかが媒介の極の課題となる。ここに示した“進学 ADVANCE”は、抽象的な意味の“普遍“(教育目標)を実現するための具体的課題が何かを示している。その課題は、「大学生に求められる資質」の形成であり、具体的には「社会課題・学問研究に対して興味・関心を持ち幅広い教養を身につける」ことである。これが旭丘高校の媒介の極が果たすべき実践的課題となる。

では、媒介を貫くこの理念的課題を実現するためにはどうしたらよいのであろうか。「学校案内」では、この理念につづいて、旭丘高校の生徒が会う3つの「出会い」が示されている。それは、「知との出会い」であり、「未来との出会い」、および「人との出会い」である。これら3つの出会いがあつて旭丘高校の教育は完成する。具体的には、「知との出会い」は、後述する単位制カリキュラムを意味し、「未来との出会い」は後述する進路探究学習を、「人との出会い」は“人は人の中で生きる”という SCHOOL LIFE そのものを意味する。この「3つの出会い」を意味あるものとして実現することが媒介の極の課題となる。

子どもが大人に成長する過程では、「モノとの対話」「人との対話」「自分との対話」「歴史との対話」の「4つの対話」が必要であるというのが私の持論である⁽¹¹⁾。この「4つの対話」は、旭丘高校の理念である「3つの出会い」と共通するところがある。ただし私の「4つの対話」は平面軸でのそれであるが、旭丘高校の「3つの出会い」には「未来」という時間軸が入っており、それだけ内容が濃い。他方、旭丘高校の「3つの出会い」には、私のいう「自分との対話」が欠けているように見えるが、「出会い」そのものが自分との対話を想定しているので、「自分との出会い」は3つのすべてにおいて前提とされている。媒介の極を抽象的に言えば、この極を通じて以上に述べた”4つの対話“ないし”4つの出会い“の世界が貫かれていなければならない、ということである。

ところでこの「4つの出会い」は旭丘高校においてどのように具体化されているのであろうか。それについてここでは要約的に検討してみたい。

「知との出会い」は、授業そのものが中心となる。その説明には「一人ひとりの異なる時間割、基礎、応用、発展など充実した開講科目」との出会いと書いてあり、単位制カリキュラムを想定している。開講科目の中には、自然・社会および人間に関係するモノ(ものごと)の世界が入っているものであり、私のいう「モノとの対話」に相当する。この「モノとの対話」の世界を生徒自らが選択し発見するところに「単位制」の核心的意味がある。生徒自らが見いだすべき「モノ」の世界を特定出来るように、広い世界を工夫し提供したのが旭丘高校の単位制カリキュラムである。

「未来との出会い」は進路探究学習を意味し、そこには「今の自分を鍛え、招来の自分を探す。現代をより良く“生きる”ために」と説明が付記されている。これはまさに私のいう「自分との対話」であり、生徒が各自未来を展望した人生観・世界観をつくることを意味する。ここにおいて、「歴史との対話」が前提となることは言うまでもない。

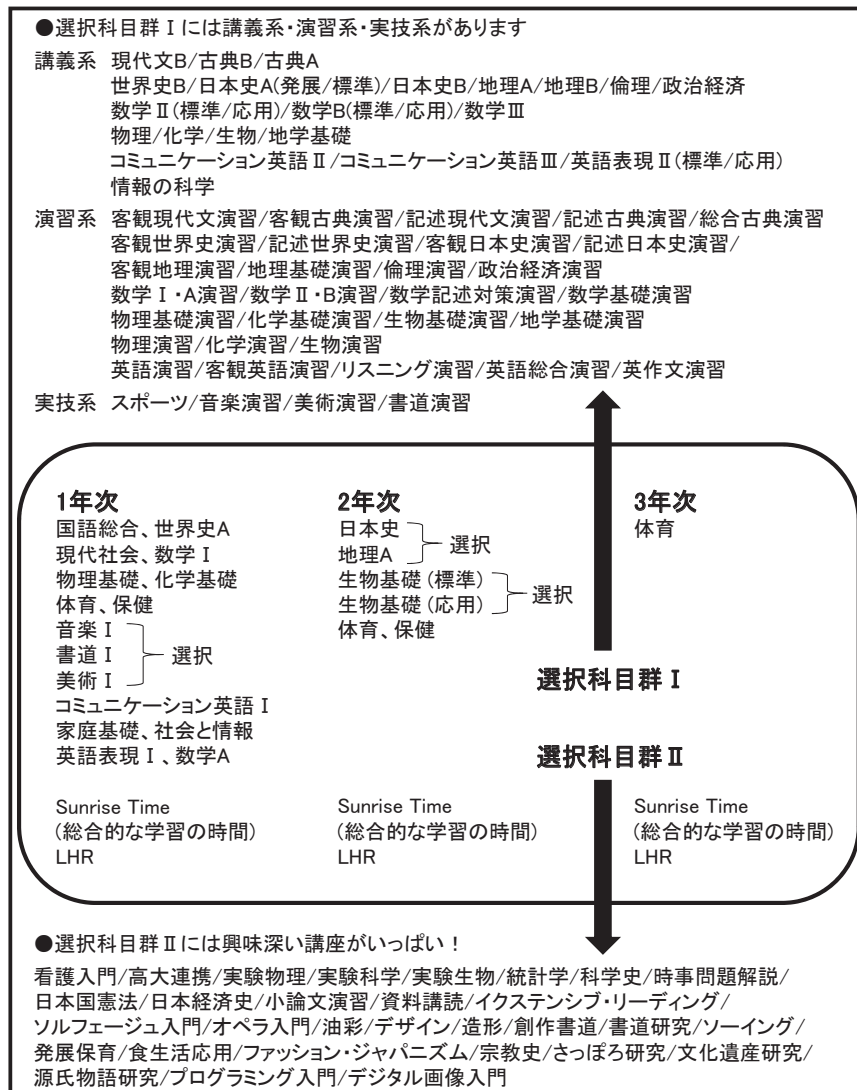
「人との出会い」は、SCHOOL LIFE そのものを意味し、それには「人は人の中で生きる」と付記されている。人は、一人で生きることが出来ない。具体的には生徒同士の出会い、教師その他学校職員との出会い、社会人との出会い、読書を通しての“姿なき他者”との出会い、などが想定される。人との出会いの幅の広さと深さが自己実現に貢献する。私のいう「ヒトとの対話」である。

この「4つの出会い」は、媒介の極とは何を実践する世界かを要約的に示しているのであり、それぞれの出会いが具体的にどのように現実化しているかを検討することが以下の行論の課題となる。人が子

どもから大人へと成長する過程において、この4つの世界は避けて通れないし、そこで豊かな経験をすることが青年期であるこの期の最大の課題となる。

2 媒介の極 1ーモノとの出会い (単位制カリキュラム)

2018年度の単位制カリキュラムは次の図のとおりとなっている。



出典：「2018年学校案内」北海道札幌旭丘高等学校

学校の教育目標は、学校の教育課程に具体化する。つまり旭丘高校の教育目標(普遍の極)の具体化は、第1に単位制カリキュラムに現れる。以下ではこの単位制カリキュラムの内容とその特徴について触れてみたい。別図で分るように、そのカリキュラムは、必修必修科目と選択科目群Ⅰおよび選択科目群Ⅱ、総合的な学習(Sunrise Time)からなっている。

必修必修科目は12科目34単位で、これらの科目は、人間能力の共通にして、基礎基本をなす力

を育成する科目であり、だから共通必修となる。小学校 1 年から積み上げてきた共通義務教育は実質的にはここで終わると考えられる。これ以降の学校教育は多様性の原理で貫かれる。

選択科目群Ⅰは、ほぼ 80 科目で構成され、講義系、演習系、実技系からなる普通教育に関する科目であり、教科書や副教材を使用する。演習系科目は「入試レベルの問題等を実践的に学習する」科目で、講義系科目の演習版といえる。実技系科目は、体育・音楽Ⅰ・美術Ⅰ・書道Ⅰなどの普通教育に関する科目の“演習版”であり、それぞれの科目が含む技術と精神を実践的に深める科目といえる。

選択科目群Ⅱは、すべて学校設定科目で、ほぼ 30 科目で構成されている。そこでは「学問・研究に関する関心や資質を伸ばし、真理の探究に向かっていくことを重視しています」(2018 年度版『学校案内』p.6)とされている。その科目は、「ゼミ基礎」「文化理解」「情報化社会」の 3 つの学校設定教科に区分される。

「ゼミ基礎」を構成する各科目は、後述する「総合的な学習の時間」(Sunrise Time)の主要な一部である「ゼミナール・ライフ」の学習を深め、補完する科目で出来ている。具体的には看護入門、統計学、科学史、日本国憲法、時事問題解説、日本経済史、資料講読、高大連携などの科目が入る。「文化理解」は、ソルフエージュ入門、オペラ入門、油彩、デザイン、創作書道、食生活応用等などが入る。人間の美的関心を育て形成する科目である。「情報化社会」にはプログラミング入門、デジタル映像入門などの科目が入る。これら 3 教科の科目群はいずれも「未来との出会い」ないし「自分との対話」の契機となる科目であり、学問・研究に対する関心を深め、人生観や世界観を豊かにし、教養を高める役割を果たす。

こうして開講科目は、全部で 100 科目を超えており、生徒の選択の幅を広げている。以下では、旭丘高校の単位制カリキュラムの特質について検討したい。

第 1 にいえることは、教師中心のカリキュラムから、生徒中心のカリキュラムにかわったということだ。この変化は、生徒の受動的な学習姿勢を変え、生徒が自ら考え、自らの道を自ら選択する姿勢を高め、自主性・自立性や主体性・個性を高めようとする改革であるといえる。つまり自らを発見するための科目群である。

第 2 にいえることは、この単位制が、生徒の学習が受験本位ではなく、将来の人生設計を目指し、「大学でやりたいことは何か」、「どのような職種につくのが夢か」といった「本質的な話題」を問題としているということである。この単位制カリキュラムを通して、生徒は「おのずと自分の将来と社会とのかかわり方へ導かれていくことになる」と単位制推進委員会は言う。この指摘はまさに、生徒が自らの人生観や世界観を問うということに他ならない。

第 3 に、このカリキュラムは、従来型の文系型・理系型のコース制をとらないということである。文・理分離型コースより、文理を統合して学習できる形式を重視したのである。これは日本の社会で今後ますます必要となる文理統合型知識（教養：自然と社会を統一して考える文化）を重視したカリキュラムといえよう。単位制のカリキュラムの創出に当たって中心的役割を果たした蒲生崇之は、「自ら真理を探究する人間」の育成という重点目標に照らして、生徒の学習からの逃避を抑え、幅広い教養の形成を促すという視点を欠いてはならない」という⁽¹²⁾。いま日本に問われているのは、日本の企業人が国際的に通用する教養に欠けているという点である。教養は人を結びつける。早くから文・理を分けるカリキュラムはこの点で欠陥をもつ。

第 4 に、このカリキュラムは学年制をとらない。2 年次以上の授業は形式上 2・3 年次混在である。こうすると生徒の集団の質が違ってくる。また旭丘高校では通常の 40 人単位の HR 集団はない。40 人単位のクラスを 2 人の担任が担当することになっており、実際は 20 人クラスとなる。2 年次以降になると、生徒集団の核心であるクラスは、総合学習の時間である Sunrise Time の 20 人クラスをもって構成される（詳しくは後述）。これは関心や課題を共通にする生徒集団であり、偶然的・機械的クラス集団で

ある古いHR集団とは異なる。また生徒会活動や特別活動・行事などにおいても内的連帯が強い。大学のゼミに類似した形態である。

第5に、科目数が多いということは、同じ科目でも、到達度や進路目標の違いにより複数の科目に分かれて構成できるということである。選択科目Ⅰの科目には、「客観演習」「記述演習」とか「基礎演習」とか、あるいは単なる「演習」とかがある。これらは習熟度別学習や少人数学習とか「調べ学習」等と言った授業スタイルによる違いであり、生徒の学習達成度やモチベーションの違いに応じて、適切な授業を選択できることを示している。

第6に、この単位制のメリットとして蒲生は先の論考で次の4点をあげている。4点のメリットとは、「学習意欲の高まり」、「わかる」授業の提供、「進路意識の形成促進」、「入学者に向けた宣伝効果」である。「学習意欲の高まり」のメリットは「受け身の学習から主体的な学習へ」の転換を、「わかる」授業のメリットは、普通科目を「進路別や習熟度別などによって選択できるように設定」したことを、「進路意識の形成」のメリットは、「文理の枠などにしばりを設けず、自分で進路や学習の理解度を考慮しながら」「具体的な志望大学・学部・学科選びに必然的に取り組むようになる」というメリットを、そして最後に「入学者に向けた宣伝効果」というメリットでは、旭丘高校が「“進学重視型”普通科単位制カリキュラムという特色」をもつ高校であることが中学生にとり宣伝効果を持つという点をあげている。

こうした特色と同時に、単位制のもつ問題点・課題として、旭丘高校単位制推進委員会は先の論稿で次の様な点を指摘している。

問題の第1は、「生徒が自分の将来について、望ましい意識を持つことは容易ではない」という生徒サイドの問題である。大学の内容や専門分野を知らない生徒が、自らの志望大学を決めることは至難である。ましてや親や教師に依存してきた生徒にとって、この選択は難しい。他方旭丘高校は生徒主導型の高校である。生徒と高校との間のこのギャップは大きい。旭丘高校がⅠ年次から進路探究学習に力を入れているのはそのためである。この課題は教育課程すべての分野で解決すべき課題である。学校設定科目では教師の教材開発能力が問われる。普通科目でも科目の内容が現実世界とどのように関係するかを説明できないとならない。インターンシップや社会活動でも同じことが問われる。こうした工夫は、生徒が自分の将来について望ましい意識を持つことが出来るようにするための工夫である。

問題の第2は、「生徒に関わる周囲の姿勢の問題である」。教師主導から生徒主導への転換は「教育の本質的転換」である。この転換を周囲の人に理解され、支持されないといけなない。他校から転任してくる教師ですら教師主導型の指導になれてきた。彼らは“国公立文系型”、“国公立理系型”という類型パターン（コース制）になれており、絶えずその復活を説き、単位制には「無駄が多い」という。こうした思考パターンは親や生徒の中にさえある。人は他者との対話の中で成長する。従って他者関係の質が問われる。「生徒主導型の学校づくりを進めるには、生徒の周りにいる人々に対し、生徒が迷いながら自分で答を探し当てようとする過程の重要性、並びにそれによって引き出される教育成果を、当事者が発信し続ける覚悟が必要となる」と単位制推進委員会は言う。

問題の第3は、100以上の科目を前にして、生徒が自由選択で作成する時間割の編成がきわめて困難だということである。旭丘高校では、そのためコンピューターソフトを駆使し「約200パターンの複雑な時間割の作成が強制される」という。さらに時間割を完成するには、約半年の時間が必要だという。単位制推進委員会は、中央教育審議会や行政が「一人一人の能力・適性に応じた教育」をいうのであれば「予算面での支援、特に施設拡充と教員数の増大」や「時間割作成の事務スタッフの設置」などは「避けて通れない問題である」という。

こうした問題がありながらも、旭丘高校はそれらの問題を克服し、10年以上にわたる単位制カリキュラムの実績を積み、その結果に確信を持っている。その確信は以下に述べる総合的学習のもつ実績とあ

いまって確かなものになっている。

3 媒介の極 2—未来との出会いの世界（総合的な学習の時間—Sunrise Time）—

媒介の世界の第 2 の極は、総合的な学習に具体化される。旭丘高校では総合的な学習の時間を重視しており、それを **Sunrise Time** とよんでいる（以下では **ST** と呼称）。それは校歌の一節にある「昇る朝日の力あり」からくるものだ。まずこの **ST** の趣旨を「学校案内」をとおして見てみたい。

自分で科目・講座を選択するためには、しっかりとした将来設計が重要です。転換期の時代とされる現代を生きる生徒たちが、将来を見通すためには、知見を広げる体験や考えをまとめてみる時間をもつことが必要です。⁽¹³⁾

ここには、**ST** の時間が生徒の将来設計と不可分の関係にあることが述べられている。つまり「未来との出会い」である。また **ST** の時間が、カリキュラム上の他の開講科目の選択と密接に関わっていることが明らかにされている。科目の選択は自分の人生観や世界観の形成と関わる。この人生観や世界観は、普通科目の修得だけでは得られない。体験や経験知が必要になる。体験知や経験知は単に科目の修得だけでは得られにくい。それを **ST** の時間が保証しようというのである。こうして **ST** の時間は、旭丘高校のカリキュラムの核心に位置付けていることを知るのである。

さらにまた「学校案内」は、**ST** の時間の持つ意味を次の様に説明する。

（**ST** の時間は）“学び方やものの考え方を身につけ、課題の発見や解決のための探究活動に主体的・創造的に取り組む”ことを主な狙いとしています。**Sunrise Time** は専門的な学問への課題を見つけ、テーマに基づく調査研究を行い、論文にまとめ上げるという力を体験的に身につけていきます。

ST の時間のもつ意味は広くて深い。「学び方」や「ものの考え方」をそこでは学ぶ。また「課題の発見や解決のための探究活動」に主体的に取り組み、課題を見つけたら「テーマに基づく調査研究を行い」、その結果を「論文にまとめる」。これは大学でのゼミ活動とほとんど同じであるし、さらには大卒後社会に出てからの研究・学習活動にも共通する。**ST** は、「真理の探究」に本格的に取り組むというのである。**ST** の最終目標は何か。それは、「大学が求める学生としての資質」の形成であり、高校と大学を接続する接点である。同時に自らの人生の目的・課題を見いだす重要な機会でもある。

ST の時間は週一回で 3 年間続く（3 単位）。内容は、読書活動（1-3 年次）、宿泊研修（1 年次）、ゼミナール **LIFE**（2-3 年次）、ゼミ研修旅行（2 年次）、研究発表（1-3 年次、現在では 2 年次）、進路探究学習（1-3 年次）、高大連携プラン（1-3 年次）等で構成され、多様である。こうした活動の内容とその意義について、以下で紹介し検討したい。

入学して 1 ヶ月後 2 泊 3 日の宿泊研修（夕張）が行われる（現在は北広島で 1 泊 2 日）。ここでの目的は「自主・自立の形成」である。自立には「自律」も入る。「自律」（自己指導力）があって共同社会での「自立」が可能になる。旭丘高校の生活面でのコンセプトは、「公共と共有」であり、「自由と責任」である。「自由」は「指示を受けない、自己中心でない」ことを意味する。「公共と共有」は旭丘高校の生活空間を支配する原理であり、共同と共生、利己的個人主義の克服、自己責任の原理などで形成されていることを意味する。宿泊研修の時間と場はすべてこうした原理で貫かれる⁽¹⁴⁾。

たとえば、研修の日程と場所は事前に知らされており、各時間帯への集合は各自の責任である。指示は全くない。起床・就寝時間を告げる指示もない。食事も時間内に済ませばよい。自律的態度の形成が主眼となる。研修テーマは調べ学習である。夕張の石炭、化石、メロン、映画（夕張映画祭）等をテーマと

して、それに関係する地域や施設を見学し、また関連する映画（「プロジェクトX “赤いメロン”」）や講義を見たり聞いたりして、さいごに帰校後レポートを書き、「作品集」にまとめる。優秀作品（各クラス2点）は公表され、学校祭その他で展示される。

こうして新入生は、その最初において、この学校がいかなる規律と原理で動いているかを知る。

「読書活動」は3年間通して行われる。1年次は朝読書で始まる。朝の10分間を利用して好きな本を読む。入学当初、岩波新書の『読書力』（斎藤孝）を全員が読み、宿泊研修で重要な箇所5カ所を各自選びだし、それを学習ノートに抜き書きする。朝読書は、2年次以降になると、共同課題研究や個人課題研究と関連した本や新聞・雑誌を読む機会となり、こうして「朝の読書」は「読書活動」へと転換し、3年次の論文執筆と結びつく（現在では2年次）。

2年生になると「ゼミナール LIFE」が始まる。このゼミは次の様に説明されている。

“LIFE”には、“人生”・“生活”・“生命”・“いきもの”等の意味があります。私たちを取り巻く様々な“LIFE”の現状や歴史、そして未来のあり方を探る中で、それらを取り上げている学問研究の世界へ入っていきます。大学で行われている研究成果などを参考にしながら、グループまたは自分で調査・実験などの資料集めを行い、レポートや論文、作品に仕上げて発表するという企画です。（『2018・学校案内』）

この“ゼミナール LIFE”には、「コミュニティ・ゼミ」「国際ゼミ」「環境ゼミ」「メディカルゼミ」「いのちゼミ」「サイエンスゼミ」「文化ゼミ」「経済ゼミ」の8ゼミがあり、1ゼミ20人で構成し、各ゼミ一人の担任がつく（3学年で48人）。これは通常の高校のHRクラス（40人）に該当するが、興味・関心を共通にする生徒の集団活動（クラス）としての意味を持つ。生徒の一人は次の様に言う。

私はコミュニティ・ゼミに所属し、教育と経済の関わりについて研究しています。旭丘のゼミは読書活動やプレゼンテーション発表、レポート提出など大学でも通用する力を強く意識しています。卒業した先輩が大学へ行っても困らないというほど、レベルが高いものなので、とてもやりがいがあります。（『2018・学校案内』）

STの時間の中心の一つに進路探究学習がある。それは1年次の学部学科研究会に始まる。大学の学部学科の分類は1年次の16クラス（20人単位）に合わせて16分類とし、各クラス10人ずつのチーム2チームを編成し、それぞれが分類された学部学科のいずれかを担当し、調べて紹介する。各チームは割り当てられた学部学科について、その特色、専門分野、社会との関わり、職業との関連、資格・免許、必要な知識・教養・受験科目、関係する道内大学、道外大学の10テーマを10人で分担し、資料を集め、インターネットで調べる。調べた結果は資料としてまとめ、それにもとづいてプレゼンテーション資料を作成する。この「調べ学習」は自分の志望学科とは関係ないが、プレゼン発表時には自分の志望する学科を聞きに行く。従ってこの進路探究学習は、「調べ学習」の意味だけではなく、プレゼンテーションに必要な技術をも学ぶ学習の機会となる。

そのほか旭丘高校独自の進路探究学習としては、学問研究会（1・2年次）、進路・進学講演会（全年次）がある。学問研究会は高大連携事業であり、各分野の大学教師を呼び、それぞれ専門分野の講義を行うものである。これには2018年だけで20人以上の大学研究者が来ている。高大連携事業には、このほか直接大学の授業を聞く機会がある。北海道大学教養課程の講義の聴講（単位取得可）、小樽商大による高校生対象の授業（その成果は『15歳からの経済学』『15歳からの経営学』『15歳からの企業法学』として出版されている。日本経済評論社）、千歳科学技術大学の講座「eラーニング」の受講などである。進路・進学講演会は、旭丘高校OBの先輩など社会人に来てもらい、自らの体験や最近の入試情報などを聞く会である。

進路探究学習にはこのほか、札幌市立高校が共同して実施する事業がある。これには高大連携推進事業、職場体験学習（1年次）、進路セミナー（1年次）がある。高大連携推進事業は上述した（北大、千歳科技大、札幌市立大、小樽商大、北海道医療大）。進路セミナーは、入学直後の市立高校生全員を集め、講演を聴き、各校代表生によるパネルディスカッションを行うもので、2018年のテーマは「私の夢・将来の夢」であった。職場体験学習（インターンシップ）は、地域の企業や団体に接触する機会であり、社会と接触できる初めての機会となる。

研究発表会（ST発表会1-3年次、現在は2年次）は、各年次の最後に行う事業で、その年度のST活動の成果を発表する場である。1年次では2年次から選択するゼミナールに関するテーマについて「調べ学習」した成果を発表する。2年次では、各ゼミ単位で行った課題研究について発表する。これは関心あるテーマ毎にグループ研究を実施し、レポートにまとめ、発表するものである。3年次の研究発表会は個人研究の成果の発表の場であり、学外にも公開し、各ゼミ一人の代表を出し、その個人課題研究の成果を発表する。これには絵画・書の作品発表や実験なども入る。3年次の個人課題研究は重要視され、校長以下教師全員が複数の生徒を担当し、個々の生徒の選んだテーマについてその研究活動を指導・支援する（現在、校長はしない）。この活動を通して生徒は、読解力、思考力、表現力を向上させることができる。

2年次のゼミ研修旅行（4泊5日）は、各ゼミの課題研究のテーマに関して、関連する企業や施設・大学などを訪問し、調査・体験学習をして、結果をレポートにまとめる。また2年次の職場体験学習も、ゼミグループの研究テーマに関連した訪問先を選択し、ゼミ課題研究を深め、レポートにまとめる⁽¹⁵⁾。

こうした内容をもつ総合的学習の時間は、明らかに自分の「未来との出会い」の時間であり、「自分との対話」の時間である。自分の人生を考え、いかなる世界とつきあうかを模索し、見いだす時間である。まさに自らの人生観・世界観を形成する時間であり、それを一人で模索するのではなく、STという時間を設け、様々なヒトとの対話を通して模索するのである。それは「自分との対話」「未来との出会い」の時間であるが、同時に「モノとの対話」の時間であり、「ヒトとの対話」の時間でもあるのだ。

4 媒介の極 3—人との出会いの世界（School LIFE）

媒介の極の第3は人との出会いの世界である。

子どもが大人に成長する過程では、モノとの対話、ヒトとの対話、歴史との対話、自分との対話が必要であることはすでに述べた。このうち「モノとの対話」については、「媒介の極 1—モノとの出会い」と「媒介の極 2—未来との出会いの世界」で述べた。ここでは主として「ヒトとの出会い」について、旭丘高校の生徒がどんな人と対話しているかを述べたい。それは、旭丘高校にあつては、生徒同士の対話、教師との対話、大人・社会人との対話、国際的なヒトとの対話、更には読書を通しての“姿なき他者”との対話の世界である。以下それぞれについてその実相と意味について触れてみたい。

(1) 生徒と生徒との出会い

生徒同士がふれあう場合は、授業以外では、一つは生徒会であり、もう一つは部活動である。

生徒会は全員参加の組織で、生徒の日常生活の形成・管理の自主組織である。総会が決定機関であるが、日常的には学級会が基礎組織であり、学級会はクラス代表2人を選出し代議員会を組織する。また学級会は常任委員を選出し、次に挙げる6つの常任委員会を構成する。つまり選挙管理委員会、旭陵（生徒会誌）編集委員会、自治委員会、保健委員会、体育委員会、文化委員会である。これらの常任委員会とは別に、生徒会には次の5つの外局がある。メディア局、放送局、新聞局、図書局、ICC局がそれぞれある。外局は生徒の自主参加で構成される。さらに特別委員会として旭丘祭実行委員会があり、その委

員は学級会が選出する。これらの委員会はそれぞれ分担任務を持っており、日常的にその業務をこなす(旭丘高等学校『学校要覧』)。

生徒会執行部についていえば、生徒会長が頂点に立つ。生徒会長は生徒全員の投票で選ばれる。生徒会長は、副会長 2 名、会計 2 名、庶務 2 名を指名する。またこの執行部には旭丘祭実行委員会の委員長および各常任委員会の委員長 6 名が参加し、全体で総務委員会を構成し、これが生徒会の執行機関となる。生徒総会は総務委員会の発議により開かれる。

生徒会には、体育系と文化系のクラブおよび外局との連絡協議の組織として、部局長会議がある。これには生徒会執行部も参加する。文化系クラブには、合唱、美術、華道、書道、生物、写真、文芸、創画、弁論、創楽の各クラブ、およびボランティア同好会等がある。体育系クラブには、バスケットボール、バレーボール、テニス、ソフトボール、バトミントン、サッカー、スキー、陸上、野球、卓球、弓道、剣道、チアリーディングなどがある。これらのクラブ活動には生徒の 9 割が参加している。

これらの組織や部(クラブ)における活動が、授業以外における生徒のふれあいの場となる。その空間はきわめて広い。この空間を支配する旭丘高校の伝統的な原理が「生徒主体」という原理である¹⁶。この空間を生徒が自主的・主体的に創造するのである。これは授業活動とはまったく異なる意味をもつ活動である。

生徒会や部活動における生徒同士のふれあいの中で、人は自らが知らないことを他者から学ぶ(他者の発見)。また自分を表現し、他者からの是認・肯定をも求める(自分の発見)。こうしたコミュニケーションの中で他者の興味や関心を知ると同時に、自らの興味・関心を発見し広げる(自己拡大)。それは人と人との出会いの中で、“モノの世界”を学ぶということでもある。たとえば生物部の自然観察の中で、環境世界の実体を知り、自らの関心・課題を発見する。新聞局や弁論部の中での人との接触で、社会や世界の実情を知り、問題・課題を見いだす。また理系クラブでの物の変容に接することで技術の世界に目を開かれる。こうした世界に対する視野の拡大は、それが生徒同士のふれあいだからこそ、その影響は強い。

生徒同士の人との接触は、共同の世界を組織し広げるということでもある。生徒会活動やクラブ活動の中では話し合いや励まし合いが見られ、連帯・信頼・チームワークの輪が広がり、人を大切にすることを知り、マナーや規律の重要性を知る。組織の形成・管理の技術も習得する。共感・共苦、共通感覚の世界を経験する。これらはすべて大人になる過程で必要となる体験である。共同の世界は、学校内にとどまらない。全市、全道、全国にまで拡大する。高体連・高文連の活動、高校総体(インターハイ)、全日本合唱コンクールや弁論部の全国大会、スキーその他の体育系の全国競技大会などあげればきりがないうほどのネットワークが広がる。こうした共同の世界を作り出す経験は、授業活動では困難であり、大人になる過程で独自の意味を持つ。

(2) 生徒と教師との出会い

旭丘高校における生徒と教師の対話も広い。それは授業活動においてまず現れる。授業科目は記述したように、通常の高校に見られる科目のほか、演習用の科目(選択科目群Ⅰ)と学校設定科目である選択科目群Ⅱがあり、これらの科目においては、教師の創意・工夫や個性更には教師の人生観や世界観にも触れることが可能となる。特に選択科目群Ⅱには教科書がない。教師の人間的な生の実力が反映する。時事問題解説、日本国経済、日本経済史、小論文演習、資料講読などでは、社会問題に対する生徒の関心が喚起される。オペラ入門、油彩、造形、創作書道などでは、美術・芸術等で生徒は教師と美意識を共通にできる。食生活応用、ソーイング、発展保育などでは、日常生活における共同の世界・生活文化を創造する経験を持つ。さっぽろ研究などでは生徒の関心は地域にまで広がる。ここでの教師の活動は指

導ではなく、支援・共同である。生徒が自ら開くべき人生観や世界観の形成を支援するのである。生徒はこうした教師との共同活動を通して、そこに“教師”ではなく、“おとな”を発見する。これは「歴史との対話」でもある。生徒はおとなと接触して育つのであるが、通常生徒が接触する大人の世界は広くない。旭丘高校では、教師の中にこの“おとな”を見いだすことができるのである。これはきわめて貴重な生徒の経験となる。

その意味では、総合的な学習の中でのゼミ課題研究(2年)や個人課題研究(3年)における生徒と教師の対話も重要な意味を持つ。2年次のゼミ課題研究は、「コミュニティ」「国際」「環境」「メディカル」「いのち」「サイエンス」「文化」「経済」等をテーマとして、生徒の共同学習が展開する。20人単位の各ゼミの中で、生徒が考えるテーマ毎にグループがつくられ、共同研究が行われる。ここにおいても教師の支援活動は大きい。生徒のもつ興味・関心が、各グループ内で、またグループ間で広がる。ここに教師も参加する。教師も生徒の関心に即して学習・研究を迫られる。そして、ここに学習共同体が形成される。生徒と教師でつくる公共圏が、Association から Community へと転化するプロセスである⁽¹⁷⁾。まさに大学における研究共同体の高校版である。

3年次では、個人課題研究をしなければならない。おそらく個人で研究課題を見つけ、仮説を立て、資料を集め、実験をし、一定の結論を見だし、論文を書き、発表する、という経験は生徒にとって初めてであろう。大学進学を志望する生徒にとってこの経験は忘れることのできない経験となる。だからこそ“おとな”の支援が必要となる。旭丘高校では、この生徒支援に校長を含め全教師が当たる。60人あまりの教師が、320人の生徒を分担指導・支援する。校長でも3-4人の生徒を分担するという。生徒が選ぶ関心・テーマは多様であり、生命、経済、文化、平和、環境、人権、食生活、国際、教育などにまで及ぶ。担当教師は生徒が何を選ぶか分らない。教師の専門外のテーマを選ぶことが多い。教師も学習しなければならない。だからここにおいても学習・研究共同体ができる。大学入試ではAOや論文、面接が重視されており、旭丘高校でのこの経験は、こうした大学入試には効果的である。生徒は自分の世界(モノの世界)をもつようになるからだ。

生徒と教師の対話・接触の世界は、職員室の形態の中にも現れている。旭丘高校の職員室は一つである。大職員室で、公開された空間であり、生徒を含め誰でもその中を自由に行き来できる。一人一人の教師の間には空間があり、担任二人が並んでいる。教科別、年次別に教員がまとまっているのではなく、クラス別に教員がまとまっている。生徒はいつでもこの空間に入り、教師に会い、相談できる。生徒の相談が他の教師と関係していても、同一職員室内で連絡をとれる。教師同士はパソコンネットワークで結ばれ、共通の情報はいつでも引き出される。生徒支援に必要な情報も同様である。こうした職員室の形態は、教師本位の形態ではなく、生徒主体の形態である。そこは、いつでも生徒に寄り添って生徒と対話できる空間になっている。

(3) 教師以外の大人との出会い

ここでは、教師以外の大人と生徒との対話について触れたい。旭丘高校にはこのふれあいが意外と多い。それは偶然ではなく、意図的なふれあいであると言える。

高大連携における大学講義の聴講、学問研究会での大学教師をよんでの講義の聴講、学部学科研究会(1年)の「調べ学習」における大学人との接触、サンライズタイムなど学校での各種講演会での大人の講演の聴講、宿泊研修(1年)やゼミ旅行(2年)での「調べ学習」を通しての社会体験と社会人との対話、インターンシップ(1年)や職場体験(2年)での社会人との対話、ゼミ課題研究や個人課題研究の「調べ学習」における社会人との対話(2・3年)、などはいずれも生徒の共同あるいは単独の「調べ学習」を通じての大人とのふれあいの体験であり対話活動である。

これらの活動は、学校・地域連携、学校・社会連携、高大連携が旭丘高校では意識的に組織されていることの証しである。これらは単に調べ学習ではなく、その結果を発表しなければならないのであり、自分が何を考えているかを公にしなければならない。つまり“大人との対話”が、“自己との対話”になっているということである。更には大人との対話は、それを介して“モノとの対話”“歴史との対話”ができていくということでもある。こうした3つの対話を通して、生徒は大人へと成長するのである。

“大人との対話”で、もう一つ注目できる活動が読書活動である。1年次の「朝の10分間読書」は、各自が好きな本を読む。多い生徒は1年間で25冊以上を読むという。9月には読書会があり、そこでは自分が出会った本を他の人に紹介する。3月の読書会では、いくつかの課題図書を設け、グループに分かれて気づいたこと、学んだことを話し合う。2年次の「朝の10分間読書」では、新聞記事を読み、より専門性や社会性を高める「ニュースレポート」が加わる。またゼミ課題研究と関係する図書などの読みも加わる。これらの読書活動を通して生徒は、「文章把握力が高くなった」(56.3%)、「本を読むスピードが速くなった」(66%)と反応している⁽¹⁸⁾。3年次の「朝の10分間読書」は、個人課題研究のテーマに関連した読書や、新聞を利用した資料講読が展開される。

こうした読書活動は何を意味するか。それは目前にはいない大人との対話である。身近にいない大人との対話は、こうした読書活動を通して広がる。読書は、生徒が大人へと成長するための大人との対話のネットワークであり、このネットワークは広ければ広いほどよい。また感想発表会は、読書を通しての「自分との対話」の結果報告であり、自分の関心や人生観・世界観を示すことである。全生徒の立場から見た場合、感想発表会は、生徒同士の間に興味・関心のネットワークをつくることである。生徒はこのネットワークの中で成長する。

(4) 生徒と外国の人との出会い

旭丘の生徒のふれあいは国際規模でも広がる。それは姉妹校交流と語学研修である。

姉妹校交流は、アメリカ合衆国ジョージア州アトランタ市のホーリー・イノセンツ・エписコパル校(HIES)との交流であり、毎年1月(日本から)と7月(アメリカから)に一週間の相互交流をしている(現在は隔年交流)。旭丘高校からは選抜で12人、HIESからは10人以内の生徒が行き来する。語学研修は、オーストラリアのクイーンズランド州ブリズベン市の語学学校を中心に、午前は語学研修、午後は市内探訪・社会体験、ホームステイの体験となる。1年おきに45人以内の研修となる(現在はロンドン)。

こうした国際的ふれあいは、いかなる意味を持つか。この国際的ふれあいにより、生徒たちはまったく違った人間をそこに発見するであろう。また違った文化をそこに見いだすであろう。そのことにより自らと自らの社会・歴史を省みることができる。これからの世界に生きるためには、世界に通じる、世界で肯定される言動が必要になる。日本社会の中で培った文化が、世界に通用し是認されるという経験を次世代の人間は持たなければならない。こうした意味において、この国際交流は貴重な体験を生徒に与えるであろう。

Ⅳ 生徒の変容(個別の極)

ここでは、「個別の極」の主体である生徒が、どのようにこの学校の教育・学習活動を評価し、自己実現を目指してどのように変容しているか、を検討したい。その際、私はヒアリング調査をできなかったため、旭丘高校の学校資料にある記録を手がかりに検討することにしたい。一つは入学当初の生徒の反応であり、ふたつ目は卒業後の生徒が見た学校評価、3つめとしては現役生徒が見た自校評価である。

1 新入生の宿泊研修

最初に検討する資料は、単位制移行後に実施した新入生の宿泊研修の実践報告である⁽¹⁹⁾。

入学直後実施してきた新入生の宿泊研修は、従来1泊2日であったが、単位制発足後は、2泊3日、札幌市外の地（夕張市）で行うこととなった。その意図するところは、高校生活に主体的に取り組み、自ら課題を見つけ自ら学び、生徒同士、生徒と教師の望ましい人間関係を形成する点にあった。生徒には前もって斎藤孝の『読書力』（岩波新書）の読了が要求された。またこの研修は「自主・自立」をモットーとし、生徒は『しおり』記載の時刻通りに集まることを要求され、遅刻者は皆無であったという。

夕張での研修テーマは石炭、化石、メロン、映画と関係していたが、石炭では、「石炭から見る夕張の自然と近代史」の講話を学芸員から聞き、石炭大露頭、石炭博物館、炭鉱生活館などで「調べ学習」をし、石炭化成工業所コークス炉煙突、夕張鹿鳴館を見学した。化石では、「化石のいろいろ展示館」で調べ学習をし、選択体験で化石クリーニングをした。メロンでは、「プロジェクトX、赤いメロンー北の大地 20 年戦争」（NHK）のビデオを視聴し、地元メロン農家の専門家の講話を聞いた。映画では、選択体験学習として映画博物館「郷愁の丘ミュージアム・シネマのバラード」を見学し、最終日に「幸福の黄色いハンカチ」（山田洋次監督、1977 年）を全員で鑑賞し、「幸福の黄色いハンカチ思い出広場」を見学した。そのほか選択体験学習として、夕張市美術館の見学と地元陶芸家の指導による陶芸体験をした。

研修後、体験して「よかった」と思う場所や機会を聞いた。結果は、プロジェクトX（76.3%）、郷愁の丘ミュージアム（74.3%）、化石クリーニング（53.3%）、陶芸体験（53.1%）、幸福の黄色いハンカチ（51.4%）、石炭博物館（45.9%）、夕張鹿鳴館（42.9%）、炭鉱生活館（39.4%）、夕張市美術館（34.4%）、「化石のいろいろ展示館（32.8%）、夕張「講話」（25.3%）となる。これらは全て「モノ」の世界であり、モノの世界との接触が生徒にいかに関心のある影響を与えるかを見て取ることができよう。

生徒は、こうした研修・体験を終える毎に学習ノートに「体験学習の整理」をする。それをもとにレポートを作成し、「作品集」としてまとめ、生徒に配布された。またクラスごとに優秀作品 2 作品をパネル展示した。レポートをテーマ別に見ると、メロン（57.2%）、石炭（27.4%）、化石（8.5%）、映画（2.8%）となる。農民がメロンによる地域開発に苦節 20 年いかに努力したかに生徒は共鳴していることが分かる。モノの世界とそれを通しての人との接触がいかに関心ある生徒に影響するかをこの実践は示している。その状況を生徒の感想文を通して見てみよう。

「最初に研修先が夕張と聞いた時、“また夕張かあ”という気持ちがあった。でも、実際に研修を終えてみると、今までの旅行や研修の中で一番、内容が濃く、楽しかったという思いがある。」

「今回の研修は今まで小中学生でおこなってきたものと全く違い、一番充実したものでした。これまでのものに目的がなかったわけではなかったけれども、“夕張”という一つをテーマにした研修だったことが理由だと思います。一つのものについて多くのことを得るということが面白いものだということを知ることができ、よかったと思います。」

「私は、最初はあまり宿泊研修を楽しみにしていなかった。わざわざ夕張みたいな田舎に行って、いちいち出来事のまとめをして、何が楽しいのかと思っていた。しかしそんな思いは一目で吹き飛んだ。私が予想していた宿泊学習の 5 倍は楽しかった。夕張は田舎といえば田舎だったが、いろいろな歴史が詰まっているし、きれいな自然がたくさん残っていてとてもいい所だった。出来事をまとめるのも、疲れることは疲れたが、自分に力がつくと思えば、あまり辛くなかった。何よりも友達とたくさん話すことが出来てほんとに楽しかった。宿泊が終わってから振り返ってみると、とても短かったが、とても内容の濃いものになったと思う。」

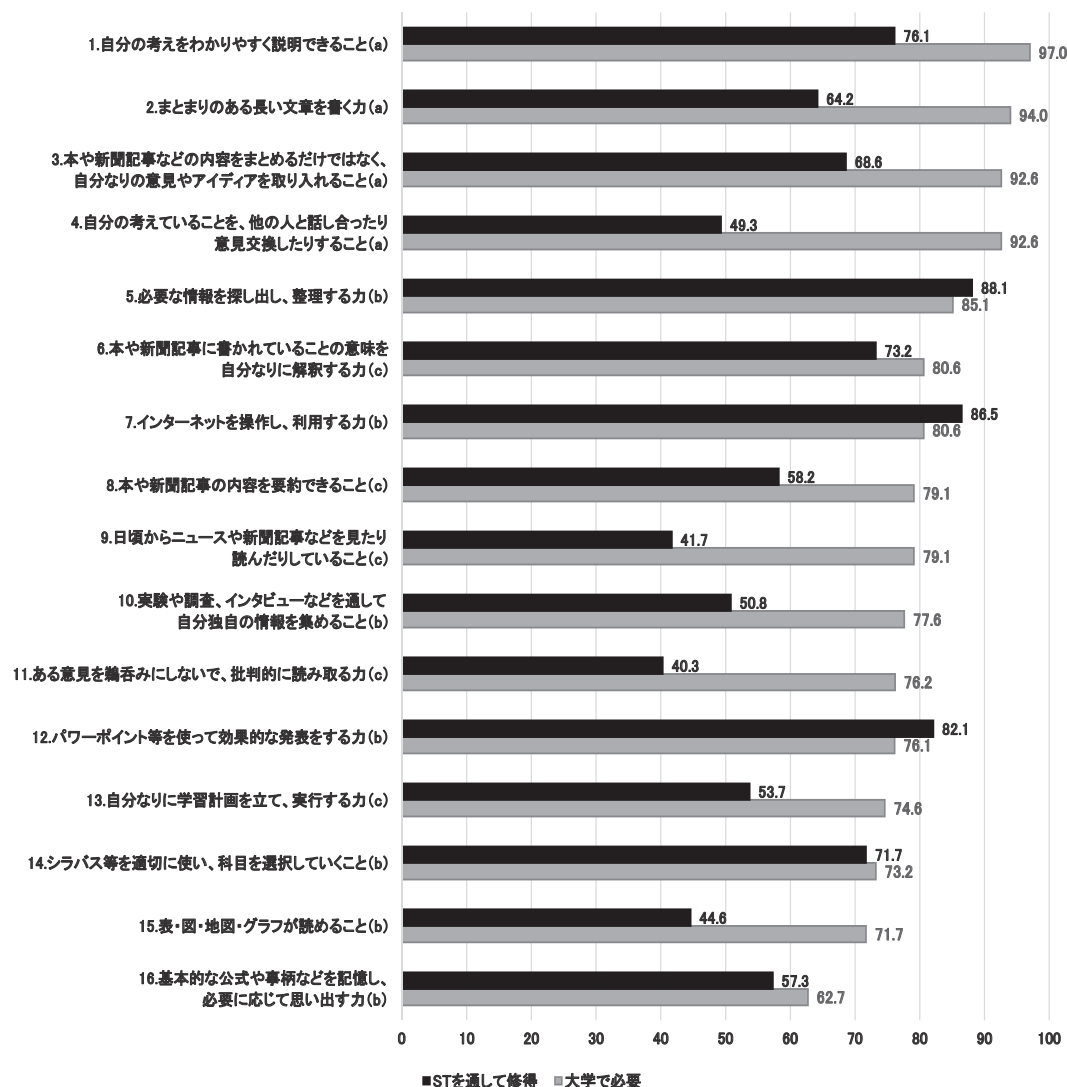
以上の感想文を通して、実際のモノやヒトにじかにふれあうことが、いかに高校生に影響するかを知ることができる。通常知っていると思っているモノの世界に、専門家を通して、かつ仲間と一緒にふれあうことが、いかに意味あるかをこうした感想文は示している。旭丘高校の生徒は入学直後こうした体

験をすることで、モノ（できごと）の世界や人との対話のもつ意味を知るのであり、またその生活を通して「自主・自立」の規律を体得できるのである。こうして生徒は入学当初においてまず変化を見せる。

2 卒業生の大学入学後の意識調査

二つ目の資料は、小樽商科大学の岡部善平氏による旭丘高校生を対象にした調査資料である⁽²⁰⁾。表1と表2がその結果の概要である。いずれも旭丘高校卒業後、大学に入学した学生の意識を調査している。

表1



私は、これら大学で必要とする力を加工して、岡部氏のいう「表現力・コミュニケーション能力」を a、「情報処理能力」を b、『課題設定・遂行能力』を c、「興味・関心の拡張能力」を d とよぶことにして、表1からいえることを検討してみたい。

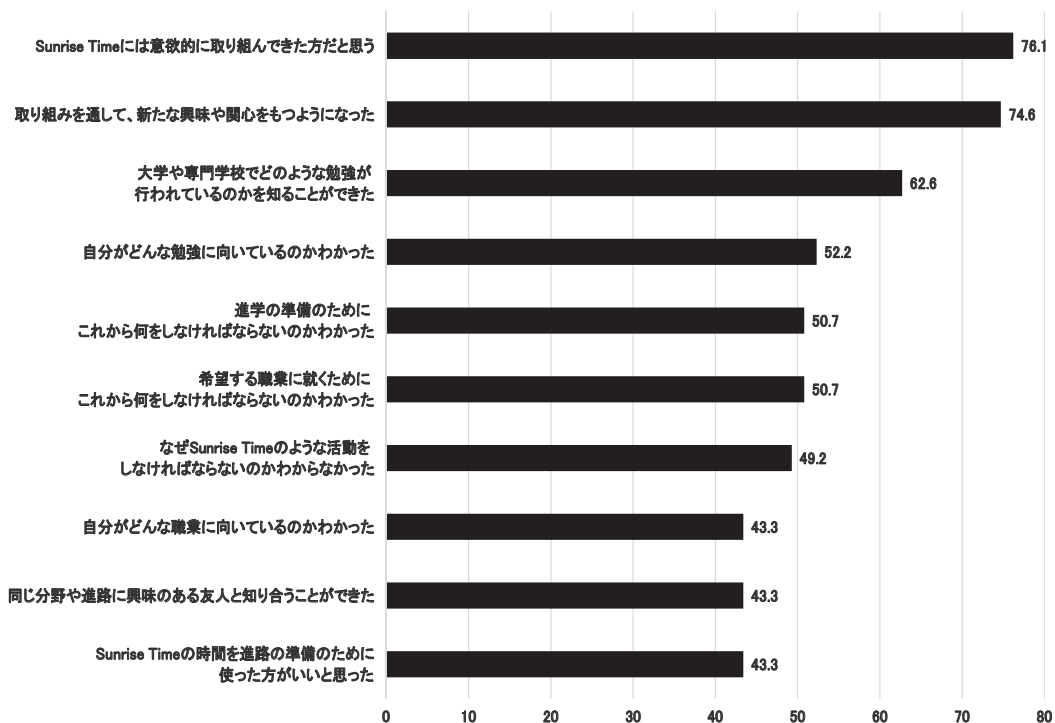
aの「表現力・コミュニケーション能力」は、大学で必要とする能力のトップに位置付いている。またこの能力を ST の時間で身につけたとする者は 6 割いて、この点積極的に評価できる。ただ質問 4 の「自分の考えていることを、他の人と話し合ったり意見交換したりすること」は若干落ちるがそれでも 5 割が ST で身につけたと応えていることが分かる

bの「情報処理能力」について見ると、この情報探索・発表能力は、大学で必要とする力に高校ですでに到達していることが分かる (5、7、12)。他方、質問 10 の「実験や調査、インタビューなどを通して自分独自の情報を集めること」においては半数が力不足を示しており、仮説を立て検証する力が不十分であることを示している。

cの「課題設定能力」を示す質問項目は、質問 13 の「自分なりに学習計画を立て、実行する力」であり、半数が ST でこの力を身につけたと応えている。他方、質問 6・8・9 は課題を見いだすための前提となる力に関係している。情報が広いほど課題を発見する可能性は広がる。また質問 11 の「ある意見を鵜呑みにしないで、批判的に読み取る力」は「批判力」を示すもので、課題設定には欠かせない能力といえよう。ばらつきはあるが 5 割前後の生徒が ST でこの力をつけたと応えている。

dの「興味・関心の拡張能力」を直接示す質問項目はないが、表 2 の質問 2 の「(Sunrise Time の) 取り組みを通して、新たな興味や関心を持つようになった」に肯定的な者が 74.6% いることから、旭丘高校での生活が、生徒の「興味・関心」の拡張に貢献していることが分かる。

表2



次に表 2 を検討したい⁽²⁰⁾。これは Sunrise Time の評価を聞いたものである。一見して Sunrise Time を肯定的・積極的に支持していることが分る。「なぜ Sunrise Time のような活動をしなければならない

のか分らなかった」が 49.2%いるが、「Sunrise Time には肯定的に取り組んできた方だと思う」(76.1%)、「取り組みを通して、新たな興味や関心を持つようになった」(74.6%)に見られるように、Sunrise Time は多くの生徒から肯定的・積極的に支持されている。ST の時間は、中学はもちろん、通常の高校にもない実践なので、当初その意義を理解するには時間が必要だったといえる。また半数の生徒において、ST の時間が、上級学校への進学や、将来の職業選択、勉強の方向などを見定める上で役に立ち、彼らの人生観（未来との出会い）の形成に意味のある時間であることが分る。ST の時間を通して旭丘の生徒は変化を見せ、成長しているのである。

3 生徒の感想文から見た意識状況

三つ目の資料として、旭丘の高校生活全般についての評価を、生徒（卒業生）の感想文を通して見てみたい。そこには部活動等の特別活動、単位制カリキュラム、総合的学習（Sunrise Time）などについての評価をうかがい知ることが出来る。これらの感想は、ほぼ生徒全般の意見を代表していると見てよいであろう⁽²¹⁾。

「高校では、“勉強さえ出来ればいい”という考えだけでは、大切なものを見失う。高校生活を振り返って、“よかった”と思えるのは、希望進路の実現はもちろんだが、勉強以外にもたくさんのことを学ぶ必要がある。旭丘には、勉強以外にも、部活動、生徒会活動、旭丘祭、バスケットボール大会、修学旅行といういろいろな活動がある。」

「サンライズタイムではプレゼンをする機会が何度ありましたが、大学でもプレゼンの講義があるので、それは役立っています。私の周りには、高校時代に一度もプレゼンの経験がない人もけっこういるので、その点は旭丘でよかったと思います。私は平和ゼミに所属して、個人課題研究では“9.11 アメリカ同時多発テロ”に関する論文を書きました。興味があることについて研究するのは、先生に言われてやるのとは違って、学ぶ意欲が持てるというか、よい経験になったと思います。」

「旭丘の良さはいろいろありますが、やはり単位制というのがよかったと思います。受ける授業ごとに教室にいるメンバーが違うので、クラス以外の友達がたくさんできました。受験が近くなったときは、情報交換の範囲が広がり、いろいろと助けられました。もう一つは開放的な職員室ですね。質問があるときにすぐに先生の所へ行ける雰囲気はとてもよかったと思います。いろいろな先生にお世話になりましたが、特に数学の先生にはたくさんの質問をしに行きました。どの先生も質問に行くのと熱心に丁寧に答えてくれました。自分は塾や予備校に通っていませんでしたが、旭丘の授業や講習を中心に受験勉強をして合格することが出来ました。」

これらの感想文には、旭丘高校における「知との出会い」「未来との出会い」「人との出会い」が豊かに書かれている。この出会いは、別の言葉で言えば、「モノとの対話」「人との対話」「自分との対話」であると言ってよい。これらの対話を通して人は大人へと成長する。それが欠けるとひとは十分成長しきれない。旭丘高校にはこの世界があることを生徒自らが示している。それは自己実現へのスタートでもある。「個別の極」が、「普遍の極」および「媒介の極」と有効に連動してみずからを実現しているといえよう。

4 個別の極がかかえる問題点と課題

先に示した岡部善平氏の調査から 10 年を経た 2012 年度の調査によると、ST の時間が「自分にとって役に立った」と回答した生徒は 75%いて、依然として ST の時間が有効に機能していることがわかる⁽²²⁾。とはいえ、2014 年度において立ち上げた「がおこれ WG」（旭丘高校のこれからを考えるワーキンググループ）の議論においては、旭丘高校の生徒の大多数は“まじめ”ではあるけれども、中学校時代から育まれた受動的な学習姿勢が、高校に入学しても”自主的““そして一歩進んだ”能動的“な姿勢に

なかなか変化しきれないのが現状である」と分析している。入学してくる生徒は依然として従来からかかえている問題を再生産しているのである。このような事態を前提として、学校は次の様な課題を提起する。

彼らは大学受験にとらわれ「表層的な学力」を重視してしまい、社会に出たときに否が応でも直面する、正解のない問題解決に向けた学力に対しては“今は必要ない”、“社会に出たら身につくであろう”と軽視する傾向にある。本校の生徒には、学内にとどまらず積極的に地域社会と繋がりを持ち、他に対してコミュニケーションを取る力を身につけ、そして“能動”の意味する“他に働きかける力”の獲得が必要であろう⁽²³⁾

これは重要な指摘である。旭丘高校が生徒に求める力は、“表層的な学力”ではなく、社会に出て有効な、“他（自然・社会）に働きかける力”、つまり“能動の力”の獲得だというのだ。ではどうしたらいいのか。サンライズ・タイム委員会の提言は次の通りである。

これからの高校教育に求められているのは、知識や技術を身につけることに加えて、思考力・判断力・表現力などを高め、問題解決に向けて他者と協働し社会で活躍できる力やより良い人生を生きる力を養成することである、そのためには「総合学習の重要性を改めて認識し、指導内容や指導方法に工夫を凝らすべき時期に来ている。

では総合学習をいかに改善するか。委員会は提言として、「論文執筆を総合学習の取り組みの中心に据える」という。「基本線はそのまま、さらに焦点を明確化し、朝の読書活動からゼミ活動、そして総合的な学習の時間が、密接に最終的な目標である“論文指導”につながることを意識させたい」、「我々教員全体がより良い論文を書かせることを目標に生徒を指導していく体制を他の高校に先駆けて取り組む必要がある」という。

考えてみると、高校生に「思考力・判断力・表現力をつける」ためには、論文執筆は最適であろう。自分にとって課題となる、あるいは関心の対象となるテーマを設定し（思考力）、そのテーマに関連する混沌とした複雑な世界をとりだし、その中を貫くある普遍的なモノを見だし（判断力）、それが自分を含めて人間や社会にとって持つ意味を考え、適切に表現し他者に伝えること（表現力）は、すべて論文を書くという作業を支える力である。また、この作業は自分を発見すること、あるいは自己実現を果たす道を見いだす、ということでもある。おそらく個別の極の主体である生徒にとって、これ以上意味のある作業はないであろう。それは自己実現に向けての不可欠の前提作業となるであろう。

V 行政機関と高校改革

旭丘高校の改革は、行政機関（札幌市教育委員会）との連携のもとに進められた。この期の高校教育改革の文科省プランは、すでに別の論考で検討しているので、ここでは略す⁽²⁴⁾。

札幌市教委による改革の発端は、1998年7月の市教委「札幌市立高等学校の今後の在り方—中間まとめ」の公表である。この中間まとめを契機にして、各高校は自校の「今後の在り方」試案を1999年6月までに作り市教委に提出することとされた。旭丘高校では、「在り方検討委員会」を設置し、意見書を作成した。しかしこの意見書には、複数の改革案と個人意見書も入っており、この時点では改革案がまとまっていないことが分る⁽²⁵⁾。

2000年8月に、市民参加の「市立高等学校改革推進協議会」ができた。これには、綾井健二・元旭丘高等学校校長が副会長として入っている。旭丘高校では同年4月に「21旭丘プロジェクトチーム」を設置し、推進協の発足に向けて、改革意見書を出している。この意見書には、21世紀ビジョン、新カリキ

ュラム案の構想、選択科目の充実化、総合的な学習の理念など、後日の単位制高校の内容と重複する点も見られるが、まだ単位制の改革案には至っていない。

2001年5月の改革推進協議会第一次答申の中の「特色ある学校づくりに向けた取り組み」の中に、初めて単位制が登場する。その後は改革プランの検討が各高校で進められ、それらを受けて、2003年2月に、市教委は「札幌市立高等学校教育改革推進計画」を公表した。その中の「新たな制度の導入」の第1に「全日制普通科単位制の導入」をうたっている。旭丘高校では同月にすでに単位制への移行を校内で決定していた。そして2004年4月旭丘高校の単位制が発足することとなった。

これとは別に、市立高校別に見た改革の進展を年度別に見ると、旭丘高校が普通科を単位制普通科にし（2004年）、開成高校は普通科のほかにコズモサイエンス科を設置し（2004年）、清田高校は普通科の中にグローバルコースを、平岸高校は普通科の中にデザインアート・コースを設置し、啓北商業高校は商業科を未来商業科に転科した（2005年）。藻岩高校は普通科のままであるが環境教育を特色とし（2006年）、定時制課程についていえば、従来あった定時制高校4校を廃止・統合し、新たに新設の大通高等学校（定時制）が発足した（2008年）。新川高校は普通科の中にフロンティアエリア・コースを設置し（2009年）、これで一応市立高校の改革の方向は決まった。なお開成高校は、2015年に中高一貫校にかわった。こうしてみると、札幌市立高校の改革が、それぞれ独自に多様な改革をしていることが分かる。まさに高校改革が、多様性の承認であることが分かる。

私は前の論考「札幌市立高等学校の教育改革」の中で、札幌市立高校の改革を「下からの教育改革」「現場からの教育改革」とよんだ。この特徴付けは、旭丘高校の改革を通して見ても検証されたといえよう。また上に記した各市立高校の改革の実相を見ても、それらの改革がいかにも多様であるかが分かる。前にも触れたが、各校の「特色づくり」は、上（文部科学省）からの方針でもあった。しかし「上からの特色づくり」であっても、実際の特色を見いだすのは各校それぞれの努力による。この努力がなければ改革は実らない。上からの方針は画餅に帰すのである。

学校の公共性は、直属の行政機関との連携がなければ実現しない。学校だけでは限界がある。旭丘高校の場合で見ても、何度も市教委と高校の間で、改革構想をめぐって緊張感をもった往復があった。旭丘高校の単位制は、市教委設置の協議会の議論を通して現実化した。それも単なる行政機関ではなく、市民参加の行政機関を通して可能になったのである。公共性の空間づくりは多様なモメントの集合であり、わけでもそこに、「個別の極」「普遍の極」「媒介の極」が見いだされることを必要とする。個別の極の実態や問題がなんであり、その問題の解決に必要な「普遍」原理が何かを見だし、普遍と個別の極を結びつけ、個別の極の主体である生徒の自己実現を果たす具体的な実践・組織・媒体を見いだすことが媒介の極には要求されるのである。この媒介空間を創出するには、教師だけではだめで、また学校だけでもだめで、行政機関の参加や市民の参加が必要となることを旭丘高校の実践は示している。

吉富重夫は「行政を行政として成り立たしめるものは……その事務の公共性、事務処理行為のもつ公共性である」という⁽²⁶⁾。さらに彼は、行政の特異性を「統制・支配・強制などに求めるべきではない。国家・社会なる全体社会の形成・維持・発展なる点に見いださるべきである」という。これは行政の本質規定である。公共性を失った行政は死滅するのである。札幌市教委の行政は果たしてどうであろうか。すでに先の小出論稿「札幌市立高等学校の教育改革（改革前史）」において詳述したように、札幌市教委の行政は21世紀に入り、「分権」「自治」の原理のもとにあった。それはさらに学校の自治を尊重した。学校の自主性のもとにおいて、各高校の改革を支援・助長した。旧教育基本法にあった「法律に定める学校は、公の性質をもつ」という理念を尊重し、現実のものにした。ここに言う「公の」とは、「国家的」という意味ではない。学校は国民とその次世代を構成する子どもたちのものであって、国家のものではない。札幌市では行政と市立高校との連携が21世紀に入り進んだ。この趨勢がいつまで続くか分からないが、

市立高校の改革に果たした市教委の指導性とその役割は貴重だった。

Ⅵ 考察

最後にこの論考について、考察を加えたい。考察の中心は、旭丘高校はその教育目標の達成に成功したかどうか、である。この高校には既述したように三つの教育目標がある。真理探究、社会貢献、文化創造である。以下、各目標別に検討する。

第1に真理探究についてである。真理探究はどういう条件があって可能になるのであろうか。

まず現実の世界（自然や社会）に対して問いを持つことから始まる。この問いは教科書からは生れない。教科書は知識の世界であり、知識はそれ自体目的とか価値を持たない。知識が目的や価値と結びつくためには、自我が自らと接する具体的な世界を必要とする。具体的な世界が混沌とし、危機と窮状をはらみ、そこからの脱出を求めているとき、この問いはいっそう明確となる。生態系の混乱や危機はそれについての知識を獲得し、認識を深め、課題を見だし、その解決を迫る。社会諸制度の混乱・危機にしても同様である。ここから問いが生れる。

また問いは自分の人生観や世界観があって初めて生まれる。現実の世界と自らの人生観や世界観との間にギャップがあるとき問いが生れる。問いは現実の世界に対する場合もあるし、自分や他者の世界観に対する場合もある。生徒同士の人生観や世界観の間に相違がある場合も同様である。こうした問いがあってはじめて真理の探究に向かう。真理の探究とは何も科学的真理や法則の探究ではない。それは誰にでも可能な知的行為である。問いが生ずるところに、真理の探究が始まる。

真理探究の条件を以上のごとくとらえた上で、では旭丘高校の生徒にとり真理探究に向かう場と実践があったであろうか。この活動がもっとも典型的に現れる場が、総合的学習の時間（ST）である。それも“ゼミナールLIFE”の時間だ。“ゼミナールLIFE”は、「コミュニティ・ゼミ」「国際ゼミ」「メディカルゼミ」「いのちゼミ」「サイエンスゼミ」「文化ゼミ」「経済ゼミ」「環境ゼミ」などのテーマ別・課題別の8ゼミに分かれる。生徒はこのゼミのうちいずれか一つに所属する。そのために生徒は、これらのテーマと関わる関心とか問いをもってゼミに参加する。このゼミの2年次では共同課題研究・個人課題研究が行われる。課題研究は当然に問いとか仮説を予定する。そして年次のさいごには研究発表が行われる。これはまさに問いの提起と真理探究の実践である。

それとは別にSTの時間には読書活動の時間が設定されており、生徒各自は関連する図書・新聞・雑誌・資料などを検索し、自らの問題意識や課題意識を収斂させる。また学校設定科目にも、これらの「ゼミ」に関係する科目が見られる。学問研究会や進路・進学研究会においては、大学における関係する学問分野への啓発が行われる。ゼミ研修旅行では各ゼミと関連する現実の世界を探索する機会を得る。法定普通科目やクラブ活動もこうした実践を支える広い基礎を提供する。これらはいずれも問いの発見と関連してくる実践である。

以上見たように、旭丘高校では真理探究の場が意識的に用意されている。「学校案内」には総合的学習の時間が「学び方やものの考え方を身につけ、課題の発見や解決のための探究活動に主体的・創造的にとりくむことを主な狙いとしています」と記されている。この時間がまさに真理探究の場となっていることの証しである。

第2の教育目標である“社会貢献”についてはどうであろうか。

何よりも真理探究それ自体が社会貢献の意味を持つ。生徒各自が目的とする真理探究における対象自体への接近が社会貢献としての意味を持つ。真理探究は、自然や社会、人間が内にはらむ危機と窮状からの脱出を課題とするが、こうした課題の解決が社会貢献と結びつく。旭丘高校の生徒は卒業後大学へ進学してもこうした意味での真理探究の活動を続けるであろう。そのことにより社会貢献の課題はより明確

となり、そのための実践は具体化される。

また社会貢献のためには、社会の現実とその成り立ちを知らねばならない。旭丘高校の教育目標の「重点目標」の3が社会貢献について触れているが、そこには「理想を求め、他者への思いやりや正義感にあふれた未来社会を築く力を育む」とある。正義は、社会における人間の共同存在を危機に貶める要因を排除する価値的意味をもつ。戦争、貧困、差別など人間の共同存在を危機に貶める現実から人間を救出する原理が正義原理である。この正義感を研ぎ澄ませることが重点目標に言う「理想」ともなる。そのための基礎となりうる人間的原理が上述の「他者への思いやり」である。「他者への思いやり」が、社会を分裂・分断から統合へと導く。

こうした「理想を求める」社会貢献の課題は、授業活動では対応できない。人間同士の社会的共同活動を媒介とする必要がある。それに関係する活動が、生徒会活動やクラブ活動であり、更には「コミュニティ・ゼミ」などの「ゼミナール LIFE」の活動である。生徒は、こうした活動の中で「他者への思いやり」の信条を形成し、社会貢献における正義の意味を知る。旭丘高校はこうした社会活動を積極的に評価し、大半の生徒がその活動に参加している。また入学直後の宿泊研修やST時間を利用したゼミ旅行や宿泊研修、インターンシップ等は実際の社会体験であり、社会人との交流の場である。そこでも社会貢献の意味や課題を知ることになる。

第3の教育目標である文化創造はどうか。

文化の世界は、衣食住をはじめ、科学・技術・学問・芸術・宗教・道徳・政治など生活に関連するあらゆる分野を包摂する。そこで人間は、人間自由のために理性や感性的諸力を使い、あらゆる方法で自然的・歴史的所与を変革し、人間のために役立たらしめる創造活動（文化活動）を展開し、生活の質を豊かにする。

また文化は、価値の追求とその実現の世界である。そこで、真・善・美・正義などの価値の実現を目指す。真は科学・学問と関連し、善は道徳・倫理と、美は芸術と、正義は政治と関連する。以上の価値追求の世界は学校の教育学習活動全体と関わる。「真」は真理探究の世界であり、「善」は人間の社会関係の中での「共同善」の追求の世界であり、「美」は美的創造を通しての人間相互の共感と連帯を形成する世界であり、「正義」は社会関係における人間の共同存在を形成する価値である。こうした価値の追求こそが学校の使命であり、学校はまさに文化の追求と創造の共同体である。

旭丘高校は、こうした文化共同体の形成を意図していると言ってよいだろう。授業活動は文化の伝達機能を持つが、それ自体は生徒にとり文化の創造活動ではない。旭丘高校では、この文化の伝達活動である授業科目が通常の高校より遙かに広い。また既述した朝の読書活動、ゼミナール LIFE、研修旅行、学校祭、クラブ活動、生徒会活動などを通じて生徒は文化創造と関わり、そこで自らの個性を形成する。文化共同体としての旭丘高校の実質が豊かにされているといえる。

結論となるが、学校は生徒にとって理性と良心を形成する場である。旭丘高校の3つの目標である真理探究、社会貢献、文化創造はいずれも理性と良心の形成を意図している。理性と良心の形成は、「私は何を知りうるか」（知の世界）、「私は何をなすべきか」（意思の世界）、「私は何を望んでよいか」（感情の世界）という人間の知的活動を媒介とする。この媒介活動は生徒個人の活動ではあるが、それだけでは出来ない。生徒同士、生徒と教師、生徒と大人、生徒と社会人との間に交換される対話の中で可能となる。ここに教育・学習活動の共同体が生れる。旭丘高校の「学校教育目標」の4には「豊かな人格の育成」があげられているが、この人格の形成は理性と良心の形成であり、それはかかる意味での教育・学習共同体の中でこそ育まれる。学校はこうした意味での人格形成の共同体であることを旭丘高校の実践は教えている。

【註】

- ¹ 小出達夫「教育と公共性 (7) 札幌市立高等学校の教育改革—改革前史・1997-2003 年」、北海道大学大学院教育学研究院教育学行政学研究室『教育システム研究』第 17 号、2018 年 7 月
- ² 小出達夫「教育と公共性 (6) 学校教育と公共性—北海道北星余市高校の教育実践から学ぶ」、『公教育システム研究』第 16 号 2017 年 6 月
- ³ 小出達夫「教育と公共性 (8)、市立札幌大通高等学校の教育改革」、『公教育システム研究』第 18 号、2019 年、6 月
- ⁴ 小出達夫「公共性と学校教育」、北海道大学大学院教育学研究院紀要第 133 号、2018 年 12 月
- ⁵ 北海道札幌旭丘高等学校『50 年史』、2008 年 11 月、p.58
- ⁶ 同上
- ⁷ 南原繁『フィヒテの政治哲学』、南原著作集第 2 巻、p.253
- ⁸ 文化と感性については、小出龍夫「公共性と教育 (5) 教育基本法と南原繁 (2)」、第 2 章「教育基本法前文と文化」を参照、『公教育システム研究』第 15 号、P.51、2016 年 7 月
- ⁹ 正義価値については、小出・同前論文、P.41 参照
- ¹⁰ 札幌旭丘高等学校『学校案内』、2018 年、p.3
- ¹¹ 小出達夫「公共性と学校教育」 北海道大学大学院教育学研究院紀要、第 133 号、p.136
- ¹² 蒲生崇之「カリキュラムの役割—札幌旭丘高校における単位制の試み」、札幌市立高等学校研究紀要 No.23、p.2 2004 年
- ¹³ 旭丘高等学校『学校案内』、2018 年、p.8
- ¹⁴ 屋敷健一、広川雅之「旭丘高校における“総合的な学習の時間”の取り組み (1)」、札幌市立高等学校紀要 No.22、p.2
- ¹⁵ 成田英行「総合的な学習の時間 (サンライズタイム) 3 年間の取り組み」、札幌市立高等学校紀要 No.24
- ¹⁶ 旭丘高等学校『50 年史』、2008 年、p.78
- ¹⁷ 小出達夫「J・デューイ“公衆とその諸問題”と公共性 (2)」、公共性と教育 3、『公教育システム研究』第 13 号 p.129
- ¹⁸ 成田英行「総合的な学習の時間 3 年間の取り組み」、『札幌市立高等学校研究紀要』、第 4 号、p.1
- ¹⁹ 屋敷健一・広川雅之「旭丘高校における総合的な学習の時間の取り組み (1)」、『札幌市立高等学校紀要』、No.22、2003 年
- ²⁰ 旭丘高校単位制推進委員会「進学重視型単位制高等学校の成果と課題」、『札幌市立高校研究紀要』第 26 号、2007 年、p.8、岡部善平氏「旭丘高校第 46 期生の進路状況と Sunrise Time での取り組みに関する調査結果報告」。
- ²¹ 横関直幸「本校の今後の在り方の検討」、『札幌市立高校・研究紀要』第 31 号、2012 年
- ²² 横関直幸、同前、p.4
- ²³ 旭丘高校サンライズタイム委員会「札幌旭丘高校の”総合的な学習の時間 “—がこれWG の提言を受けて」、『札幌市立高校研究紀要』、No.35 p.1
- ²⁴ 小出達夫「教育と公共性 (7) 札幌市立高等学校の教育改革 (改革前史・1997—2003 年)」、北海道大学大学院教育学研究院教育学行政学研究室『公教育システム研究』第 17 号、2018 年
- ²⁵ 資料・在り方検討委員会旭丘グループ「市立高校の今後の在り方」、1999 年 7 月 3 日
- ²⁶ 小出達夫「公共性と教育 (1) 吉富重夫『政治的統一の理論』と公共性」、『公教育システム研究』第 11 号、2012 年